

【研究ノート】

十勝地方におけるアイヌ口頭伝承の語り方について

—関連性理論の観点から—

高橋 靖 以

1. はじめに

十勝地方のアイヌ口頭伝承（特に散文の物語）においては、他地域と異なり、語りの切れ目で聞き手が合いの手を入れることが知られている（なお、sakorpe「英雄叙事詩」と呼ばれる別ジャンルの口頭伝承においても合いの手が入られるが、その入れ方は散文の物語とは異なる）。本稿ではこの語りの形式について、関連性理論（relevance theory）に基づく分析をおこなう¹。

2. 先行研究

十勝地方のアイヌ口頭伝承の語り方に関する研究は決して多いとはいえない。中川（1997: 255）は十勝地方のアイヌ口頭伝承の語り方について以下のように記述している。

十勝地方のトゥイタケ（引用者注：散文の物語）においては語りの切れ目ごとに「フン」という相槌を入れる（引用者注：原文のまま引用）ことが聞き手側に要求される。十勝幕別出身の山川シマ氏によると、この相槌が入らないと非常に語りにくいものだという。樺太のトゥイタハの録音資料にもそれと同様の相槌が入っているものがある。

中川（1997）は十勝地方のアイヌ口頭伝承の語り方について重要な事実を指摘したものと見える。しかしながら、中川（1997）の指摘を受けて上記の現象を分析する試みはこれまでおこなわれていない。本稿では、語り手（伝達者）と聞き手の相互行為という観点から上記の口頭伝承の語り方を分析することを試みる。

3. 関連性理論

上記の語りの様式を伝達者と聞き手の相互行為という観点から分析するにあたり、本稿では関連性理論（relevance theory: Sperber and Wilson 1995）が提示する理論的整理に注目したい。以下ではこの理論の基本的な概念について述べる。

関連性理論においては、情報意図（informative intention）と伝達意図（communicative intention）が区別される。情報意図は「聞き手に対して想定される集合 I を明示ないしはより明示的にすること」（to make manifest or more manifest to the audience a set of assumptions I）と定義される（Sperber and Wilson 1995: 58）。この情報意図を説明する例として、Sperber and Wilson (1995: 58) は以下のような英語の用例をあげている。

Passenger: When does the train arrive at Oxford?

Ticket-collector: At 5:25.

この例において、伝達者である ticket-collector（集札係）の情報意図は列車が5時25分に到着するという単一の想定を乗客に対して明示することである（Sperber and Wilson 1995: 58）。

一方、伝達意図は伝達者が「この情報意図を持っていることを聞き手と伝達者にとって相互に明示化すること」（to make it mutually manifest to audience and communicator that the communicator has this informative intention）と定義される（Sperber and Wilson 1995: 61）。すなわち、伝達者からの一方的な情報意図の伝達のみでは伝達意図は成立しない。伝達意図が成立するためには、聞き手の能動的な推論とその受容が必要とされる。

このような情報意図と伝達意図の区別は、言語コミュニケーションの理論的整理として極めて適切なものであり、口頭伝承の語り方を分析する上でも有効であると考えられる。

4. 分析と考察

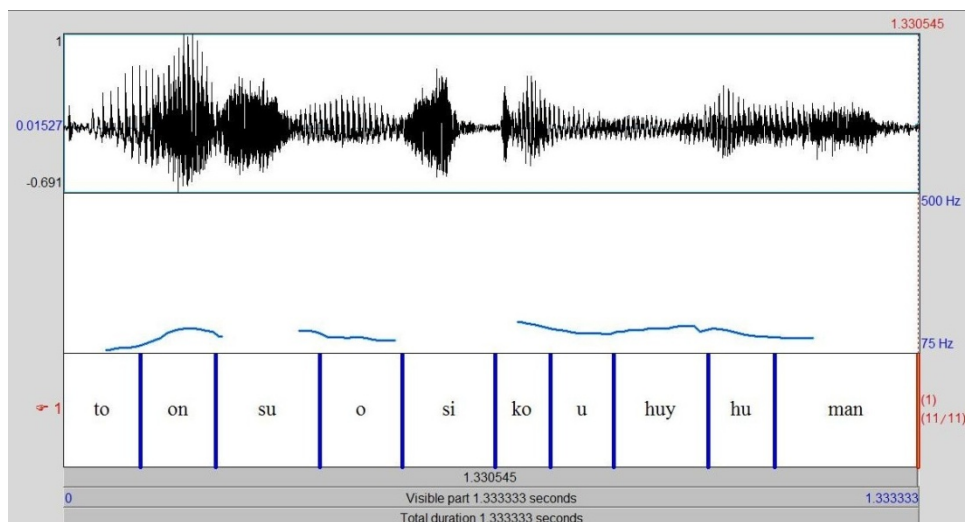
4.1 アイヌ語十勝方言の日常語における情報意図と伝達意図

本節では、アイヌ語十勝方言における日常語の用例に基づき、情報意図と伝達意図について考察する²。ここでは、この問題を考察する材料として、文末イントネーションのタイプを取り上げたい。

十勝方言において、平叙文は一般的に非上昇調の文末イントネーションで実現される。

(1) toon su osikouhuy hum an.
 あの 鍋 底が焦げる 名詞化辞 ある
 「あの鍋は底が焦げている」

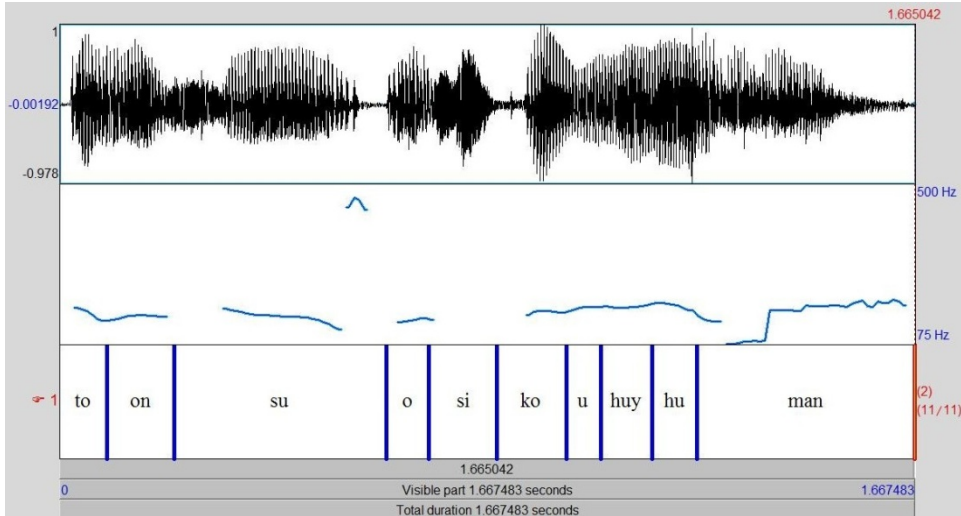
以下に例文(1)の音響分析（ピッチ曲線）を示す。なお、音響分析に際しては Praat (Copyright (C) 1992-2014 by Paul Boersma & David Weenink) を用いた。



一方、例文(2)のAにおいては、文末に下降調のイントネーションはみられず、比較的緩やかな上昇調のイントネーションが出現する³。これは平叙文において有標な現象である。

- (2) A: toon su osikouhuy hum an.
 あの 鍋 底が焦げる 名詞化辞 ある
 「あの鍋は底が焦げている」
- B. sonno ne wa.
 本当に である よ
 「本当だ」

以下に例文(2)の A の音響分析（ピッチ曲線）を示す。



例文(2)の A にみられる文末イントネーションは理論的にどのように考えるべきであろうか。以下に推論を述べる。

例文(2)において、「鍋の底が焦げている」という状況は聞き手と伝達者にとって相互に承認されたものとなっている。すなわち、例文(2)は伝達意図が成立した発話の連続体として理解することができる。一方、例文(1)は情報意図（「鍋の底が焦げている」）を含む単独の発話であり、必ずしも伝達意図を含むものではない。

この事実に加え、疑問文（相手への問いかけ）が一般に上昇調のイントネーションで実現される（高橋 2015: 17）ことを考慮すると、例文(2)の A の文末上昇調のイントネーションは伝達意図の成立を目的とした言語行為であると推定することができる。以上のように、情報意図と伝達意図の区別はアイヌ語十勝方言の日常語を分析する際にも有用な概念といえる。

4.2 十勝地方の口頭伝承における情報意図と伝達意図

本節では、関連性理論の基礎概念に基づき、口頭伝承の語り方について分析と考察をおこなう。以下で取り上げる資料は、安東モレウカ氏による tuytak「散文の物語」の冒頭部分を文字化したものである（1947 年日本放送協会採録。文字化は筆者がおこなった）。この資料は日本放送協会放送文化研究所（1948）に収録されており（レコード番号：PR158）、同資料を収蔵している国会図書館などで試聴が可能である。

以下の表記において、文末イントネーションの上昇が観察される場合には(↑)を付した⁴。また、聞き手による合の手は斜体で示した。

(3) huskotoy wano okay-an. (↑) hn.

ずっと昔から私たちは暮らしていました。

otasut peka iresu sapo i-resu wa okay-an. hn.

オタスッで育ての姉が私を育てて、私たちは暮らしていました。

ney ta ene ne yakkay i-resu pokay koyayranpetek kan an pe iresu sapo ne ru ne. (↑) hn.

いつも私を育てることさえ分からない者が私の姉でした。

(3)の口頭伝承においては、平叙文における文末イントネーションの上昇が観察される。前節で述べた日常会話の分析に基づけば、口頭伝承の平叙文における文末上昇調のイントネーションは伝達者(語り手)による伝達意図の成立を目的とした言語行為とみなすことができる。一方、聞き手はhnという合の手を入れることによって、語り手の情報意図を受容したことを明示している(すなわち、伝達意図が成立したことを明示的なものとしている)。また、中川(1997: 255)が指摘するように、この合の手は文の切れ目で義務的に挿入されている。

なお、同様の語り方は十勝方言の別の話者の語りにもみられる。以下に示す例は十勝地方出身の匿名の方によるtuytakの冒頭部分である(1967年斉藤明氏採録。文字化は筆者がおこなった)。なお、この資料はアイヌ文化研究会(2009)によって整理・公開がおこなわれており、帯広市図書館で試聴が可能である(CD番号: 10-1, 10-2)。

(4) huskota okay-an. hn.

昔から私たちは暮らしていました。

otasut'unkur otasut ta an. (↑) hn.

オタスウングルがオタスッにいました。

otasut'unkur ranmano ekimne kus

オタスウングルはいつも山狩りに行くために

kesto an kor kamuy ru, kamuy toyru kari

毎日熊の道、熊の踏みつけた道を通して、

ranmano ekimne kus oman wa

いつも山狩りをするために行って、

okakehe ta macinekur nina usa turepta usa

その後で、妻である人は薪取りやウバユリ掘りに

earikiki kan an. (↑) hn.

精を出して働いていました。

kesto an kor kamuy wen ikir, nuyekoan wa

毎日熊のみごとな肉の列、猟に恵まれて、

cise soyke en, cise sopake en kamuy ru rap. (↑) hn.

家の周囲に、家の上手の方に熊の道が下っていました。

wa, puyar kari kamuy marapto cise or en an-ahunke kor
 そして、神窓を通して熊の頭が入れられると、
 cise ot ta siruye, macinekur neokay kamuy marapto usa
 家の中で留守を預かっていた妻である人はその熊の頭などを
 opittano cise oske wa uyna wa cise or **esikte**. (↑) *hn*.
 一つ残らず家の中から受け取って家の中を一杯にしました。
 ranmano ene sirki ne wa an pe un an kus,
 いつもそのような様子でしたから、
 poro, onne su ari kam a-tunesuye wa
 大きい、大きい鍋で私は肉をよく煮て
 poro ikir rik ta, cise kotot ta,
 大きな肉の列を上、家の天井に、
 cise kotot ta kamuy kam wen ikir a-racitkere wa
 家の天井に熊の肉のみごとな列を私はぶら下げて、
 ranmano kesto an kor kamuy kam a-e kan **okaypa-an**. (↑) *hn*.
 いつも毎日、私たちは熊の肉を食べながら暮らしていました。

関連性理論の基本概念に基づけば、これらの口頭伝承の語り方は「文の切れ目で義務的に伝達意図を成立させながら展開される」と特徴付けることができる。これに対し、(3)や(4)にみられるように、文末イントネーションの上昇は必ずしも義務的なものではない。この事実は、文末イントネーションの上昇よりも文の終止ということが、これらの口頭伝承の語り方においてより重要である可能性を示唆するものといえる。

また、上記二例からの不十分な推定ではあるが、このような伝達意図の明示をベースとした散文物語の語り方は、十勝地方における社会習慣的な様式として確立している可能性がある（第2節に引用した中川（1997）の記述も参照）。

5. 他地域における口頭伝承の語り方

中川（1997: 255）が指摘するように、十勝地方の口頭伝承と類似した語り方は他の地域にも存在する。特に、サハリンアイヌにおける類似の語り方については、近隣諸民族との影響関係についても考慮すべきであろう⁵。

また、十勝地方の近隣に位置する白糠地方においては、語り手自身が *hn* という合いの手を入れるケースがみられる（『四宅ヤエの伝承』刊行会編 2007: 206）。この現象に関する検討は今後の課題である。しかしながら、口頭伝承を語る際に、語り手自身が合いの手を必要不可欠な要素として考えていたことを示す実例であるならば、十勝地方における口頭伝承の語り方を考える上でも示唆的な例といえる。

一方、北海道南西部の沙流地方の口頭伝承（散文の物語）においては、「文の切れ目で伝達意図を成立させながら展開される」語り方は通常存在しない（例えば田村（1984: 28-44）などを参照）。このような語り方は「情報意図は明示するが伝達意図は必ずしも明示しない」という性格を有するものとして位置付けることが可能といえる。すなわち、アイヌ口頭伝承の語り方の地域差を類型化する上で、関連性理論は有用な枠組みを提供しうる可能性が

ある。

6. おわりに

本稿では、情報意図と伝達意図の区別という関連性理論の基本概念に基づき、十勝地方にみられるアイヌ口頭伝承（特に散文の物語）について若干の分析と考察をおこなった。また、アイヌの口頭伝承の語り方にみられる地域差の問題を扱う際にも、関連性理論の枠組みが有効である可能性を指摘した。なお、近隣諸言語における類似の語りの形式との関連に関する本格的な検討は今後の課題としたい。

注

- 1 関連性理論は文化人類学の分野においても注目されており（例えば菅原（2010）など）、必ずしも言語学の範囲内のみで扱われる理論ではない。なお、本稿は「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班 平成27年度 第2回研究会（2015年12月5日 国立国語研究所）での研究発表に基づくものである。当日ご意見を頂いた方々と本誌の査読者に深く感謝申し上げます。
- 2 本節で用いるアイヌ語の用例は沢井トメノ氏（1906-2006）のご教示に基づくものである。沢井氏に深く感謝申し上げます。
- 3 ただし、例文(2)は単独の話者による模擬的な会話表現であり、通常の日常会話表現とは必ずしも同一視できない可能性もある。この点に関してはさらに検討を進める必要がある。
- 4 公開されている資料の性格上、本節で用いた口頭伝承資料には音響分析を示すことができなかった。この点については今後の課題としたい。
- 5 池上（2002: 1）はウイルトアの口頭伝承の一部のジャンルにおいて、語りの切れ目に合いの手が入ることを指摘している。

参考文献

アイヌ文化研究会

2009 『『東北海道のアイヌ古謡録音テープ』の内容調査研究』『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』8: 787-892.

池上二良

2002 『ツングース・満州諸語資料訳解』北海道大学図書刊行会.

中川裕

1997 「散文説話」久保田淳他編『岩波講座日本文学史』17: 246-263, 岩波書店.

日本放送協会放送文化研究所

1948 『アイヌ歌謡集 第1集』日本コロムビア.

『四宅ヤエの伝承』刊行会編

2007 『四宅ヤエの伝承：歌謡・散文編』『四宅ヤエの伝承』刊行会.

Sperber, D. and Deirdre Wilson

1995 *Relevance : communication and cognition*. 2nd edition. Blackwell.

菅原和孝

2010 『ことばと身体：「言語の手前」の人類学』講談社.

高橋靖以

2015 「アイヌ語十勝方言における疑問文のイントネーションについて」アンナ・ブガエワ、長崎郁編『アイヌ語研究の諸問題』15-25, 北海道出版企画センター.

田村すず子

1984 『アイヌ語音声資料』1. 早稲田大学語学教育研究所.

(たかはし・やすしげ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員)